

企業従業員の神経症的傾向についての研究

塹江清志・今井弘隆

生産システム工学科 経営工学コース

(1985年9月5日受理)

The Study of the Neurotic Tendency of the Employees in Enterprise

Kiyoshi HORIE and Hirotaka IMAI

Department of Systems Engineering

(Received September 5, 1985)

The purpose of this study was to investigate the relationship of the strength of the "neurotic tendency" and the property of the employees (i. e., sex, age, length of service, school career, duty, and status) in industry. The subjects were 412 employees in 2 enterprises in Aichi Prefecture. The results were as follows.

- 1) The "neurotic tendency" of females was stronger than that of males.
- 2) The "neurotic tendency" of the employees with less than 3 years continuous service was stronger than 2 other groups of employees with continuous service of "more than 3 years but less than 5 years" and "more than 10 years but less than 15 years"
- 3) The "neurotic tendency" of the ordinary employees was stronger than that of the middle management.

〈序〉

(職場の精神衛生)

1) 精神衛生とは

① 「精神衛生」という言葉

「精神衛生」という言葉は、"mental hygiene"の訳語であるが、現在ではアメリカでは"mental hygiene"という言葉に代って、"mental health"という言葉が使われている。したがって、日本でも"mental health"の訳語である「精神健康」という言葉も用いられるようになった。

② 「精神衛生」とは

「精神衛生」とは、文字通り人間の精神面に適用される衛生のことである。身体面における「健康管理」と同様に精神面における「健康管理」という意味である。

身体面における「健康管理」が、疾病に対する予防、早期発見、治療、回復期の管理、そして、健康の保持・増進を企図しているように、精神面においても同様な対応を企図するのが「精神衛生」である。

③ 「精神衛生」の必要性

これまでの日本の産業場面における衛生管理あるいは健康管理は、専ら身体の管理のみに、それもごく限られた疾病(「結核」、「高血圧」など)に対する「疾病管理」と

いう次元で行なわれてきた。しかし、人間が精神と身体との両面より成り立つものであり、心身症などの例に示されるように精神と身体とは密接な関連を有するものであり不可分離なのである。したがって、健康管理は心身両面においてなされねばならない。

また、後述のような現代の日本の産業場面、職場における「疎外状況」を考慮するとき、精神面における健康の保持が労務管理上の緊急の課題となる。

2) 職場の精神衛生とは

① 「職場の精神衛生」の意義

労働が、その意味からいっても、それに注ぐ時間やエネルギーの量からいっても、人間の生活の重要な部分を占めていることはいままでもない。成人した個人にとって労働は、それによつての生計の維持、社会参加、人間の基本的諸欲求の充足を意味し、広い意味での健康を保持・増進し、「生きがい」を獲得するものである。

この目的を達成するためには、労働が個人の健康にとってよいものであらねばならない。現代における生産の大部分は企業体とその主体となっており、大多数の人間は何らかの企業体に継続的に所属してその生産の場、職場において労働に従事している。そして、労働条件は経営側の統制下にある。したがって、経営側にはその企業体に所属する個々の労働者の健康が労働によって破綻することを予防し、健康が労働によって維持・増進される

ように努力する道義的責任がある。

これが職場の健康管理の本来的意義であり、健康管理が個人の精神面において適用されるとき職場の精神衛生となる。

②職場の精神衛生活動の対象

職場の精神衛生は、職場における精神障害に対する予防、早期発見、治療、回復期の管理、そして、精神健康の保持・増進を目的とするものである。しかし、ここで留意すべきことは、職場における精神衛生活動が「精神障害者」のみを対象に行なわれるものでないことである。精神障害者に対する管理が、職場の精神衛生活動の重要な任務であることにはちがいないが、それと同時に職場における「精神健康者」の精神障害への予防、精神健康の保持・増進も活動の重要な任務なのである。

各種の資料の示すところによれば、職場における精神障害者の率は大体0.5%以下である。したがって、職場で労働に従事する人々の99.5%は精神健康者なのである。この99%以上の人々の精神健康を管理することこそ職場の精神衛生活動の重要な目的であるべきである。

経営側が、管理・監督者層を通じて現実に日常の生産活動の中で従業員の精神衛生管理を遂行するとき、実際には精神健康者の精神衛生管理が可能なのであり、精神障害者については日常の生産活動の中では不可能である。職場が生産活動の場である限り、精神障害者に関しては、産業医などの専門家の手に委ねざるをえない。経営側は産業医などの専門家に協力する立場にあるべきであろう。

したがって、職場の精神衛生に関しての経営側の日常業務の中での努力は専ら精神健康者の精神衛生管理に求められるべきである。

3) 職場の精神衛生の現代的意義

現代企業の職場を特色づける最大の要因は「技術革新」であるが、この技術革新が職場の個々の労働者の意識、心理に及ぼす影響が、職場の精神衛生を要請する最大の原因である。現代において職場における精神衛生がことさら要請されるのは、技術革新の高度な、そして、急速な進展の結果なのである。

「技術革新」が職場に導入されることによって具現化される典型的な「労働様式」はコンペアー・システムを利用した「流れ作業」であり、そしてこの生産システムによる労働の極端なまでの「細分化」、「単純化」、「単調化」である。この労働の在り方が個々の労働者の意識、心理に及ぼす影響は以下のように考えられる。

労働の「細分化」、「単純化」、「単調化」は労働者に「人間—機械系(Man-Machine System)」を通じて労働者に「無力感」、「無意味感」を生起せしめ、この2つの意識の和としての「単純な疎外感」を生起せしめる。この意識は、仕事の中に自己を感じるができない、仕事を

通じて自己の存在意義を確認できないといった意識であり、仕事に対する「生きがい」喪失の意識である。

また、前述のような労働の在り方は、「人間—職務系(Man-Job System)」あるいは「人間—人間系(Man-Man System)」においては、いわゆる「組織と個人」の問題を通じて労働者個々に「無規範感」を生起せしめる。この意識は、職場の人間関係が極度に「手段的」なものになることからの職場(の人間関係)に対する「生きがい」喪失の意識である。

人は労働を通じて「生きがい」を獲得するものであると前述したが、現代の職場は、仕事、人間関係を通じて個々の労働者に「生きがい」喪失の意識を抱かせるものである。このことは、人間にとって最大の「欲求不満」の原因となる。

「神経症」の根本的原因は欲求不満であり、「神経症」と「精神病」が「精神障害」の主要なカテゴリーである。

したがって、現代の職場は精神障害の根本的原因を基底に内包しているのである。このことが、現代という時代においてことさら職場の精神衛生の重要性を認識させるのである。

(精神障害)

1) 精神障害

精神障害の分類の仕方、及び、それによる精神障害のカテゴリーは多様であるが、「精神病」と「神経症(ノイローゼ)」は精神障害の代表的なものである。

2) 神経症

現代はノイローゼの時代とも云われている。つまり、現代人は多かれ少なかれノイローゼ傾向を所有していると云われている。現代社会における諸々の社会的要因が現代人をして神経症的傾向を所有せしめるというのである。諸々の社会要因といっても基本的には現代社会における人間関係の「手段化」、及び社会変化の速度の増大による不適応から発生する「欲求不満」がその根本的原因である。職場においては、前述のように技術革新から生起する仕事の生きがい喪失、及び、職場の生きがい喪失による欲求不満がその因であろう。

したがって、職場の精神衛生においてもさし当って「神経症」への対応が重要な課題になる。

3) 神経症の型

神経症の型には広義には2つあり、1つは「心因反応」であり、これは「第1次反応」とか「異常体験反応」と呼ばれるものであり、専ら生物学的な反応であって、個人的な人柄・性格の特徴のない「超個人的」な反応である。もう1つは狭義での「神経症」であり、「第2次反応」とか「内的葛藤反応」と呼ばれるものであり、個人的な人柄・性格によってその内容も異なる個人特有の反応である。

狭義での「神経症」の型については従来よりそれぞれの研究者によって類型化の次元が異なり従って類型化された型についてもそれぞれの研究者によって異なるところである。

しかし、加藤正明(1981)は、従来から最も広く採用された型によって以下の6つの型に分類するのが実際的であると主張している。

①不安神経症、②神経衰弱、③ヒステリー、④強迫神経症、⑤抑うつ神経症、⑥妄想反応

そして、「心気症」は、その特徴によって②、③、④のいずれかに入れることができると述べている。

〈目的〉

本研究は、現実の企業従業員における「神経症的傾向」についての実態の一端を調査によって把握することを目的とするものである。

〈序〉の項で述べたように職場での精神衛生活動を現実的に遂行するときにさし当って問題となるのは精神健康者の精神障害への予防、精神健康の保持・増進ということであり、また対象とすべき精神障害は、前述のことから「神経症」についてである。

したがって、本研究は後述のようなMMPIテストを利用して、実際の企業の精神健康者である従業員における「神経症的傾向」について「神経症的傾向」の強さと従業員の個人的属性(「性」、「年令」、「勤続年数」、「学歴」、「地位」、「職種」と)の関係を検討することによって職場の精神衛生活動を遂行するに当っての何等かの知見を得ることを目的としたものである。

〈方法〉

(調査対象者)

名古屋市内に本社を置く「N社」、「H社」の2社の従業員、合計472名を調査対象者とした。

(MMPIテスト)

MMPIとは、Minnesota Multiphasic Personality Inventory、すなわち、「ミネソタ多面的人格目録」の略である。このテストはミネソタ大学でミネソタ州民を母集団として作られた質問紙法テストである。

このテストは、精神障害の種別と程度を判定する目安を得ることを目的として作成されたものであり、10ケの臨床尺度から成っている。この10ケの尺度のうち8つの尺度が精神障害・症状と関連のある尺度である。

この8つの尺度の番号と名称は以下のようである。

①心気症尺度、②抑うつ性尺度、③ヒステリー性尺度、④精神病質的偏倚性尺度、⑥偏執性尺度、⑦精神衰弱性

尺度、⑧精神分裂性尺度、⑨軽躁性尺度

以上の8つの尺度のうち①、②、③の3つの尺度は、「精神神経症的傾向」を測定する尺度であり、「神経症3尺度群(neurotic triad)」と呼ばれている。

④は「精神病質人格傾向」を測定する尺度であり、⑥、⑦、⑧、⑨は「精神病的傾向」を測定する尺度である。本研究の目的である「神経症的傾向」の測定のために、①、②、③の尺度を利用した。各尺度における質問項目数は、それぞれ33、60、60であり合計153項目となる。他の研究目的から調査票も多数あり、本研究のための調査票と併せて同時に同じ調査対象に実施する必要があった。したがって、調査対象者の心理的負担を考慮して、各尺度における質問項目数を減じた。

(調査票)

MMPIテストにおける質問項目の中から、「心気症尺度(The Hypochondriasis Scale ;以後S尺度と略記する。)」の33項目の中より無作為に10項目、「抑うつ性尺度(The Depression Scale ;以後D尺度と略記する。)」の60項目の中より無作為に10項目、「ヒステリー性尺度(The Hysteria Scale ;以後Y尺度と略記する。)」の60項目の中より無作為に10項目を抽出し、合計30項目から成る調査票を作成し、この調査票によって調査を実施した。使用された調査票の質問項目は、第1表に示されたようなものであった。

〈結果〉

従業員の個人的属性、すなわち、「性」、「年令」、「勤続年数」、「学歴」、「地位」、「職種」と「神経症的傾向」との関係が、第3表から第8表までの表に示されている。

S尺度、D尺度、Y尺度の各尺度における質問項目数はそれぞれ10項目であり、各項目に対しての調査対象者の回答(「はい」、「いいえ」)に応じて「1」点か「0」点かのいずれかの得点が与えられるので各尺度での得点は1人の調査対象者については最高「10」点、最低「0」点となる。

1人の対象者の各尺度における得点の合計をその対象者のN尺度(「神経症的傾向」尺度)の得点とした。したがって、最高「30」点、最低「0」点となる。

各尺度における得点が大きである程「神経症的傾向」が強いことを示すものである。

次に、「神経症的傾向」と「個人的属性」との関係に対してメディアン(中央値)検定を施すために、カイニ乗(χ^2)検定のための分割表を作成した。

①「性」との関係について

分割表に対してカイニ乗(χ^2)検定を施したところ、 $\chi^2 =$

第1表 質問項目

1. () ねむりがとぎれがちでよくねむれない。
2. () 便秘や下痢はしない。
3. () 首のうしろが痛くなることはめったにない。
4. () 筋肉がびくびく動いたり びくっとしたりしない。
5. () ここ2, 3年だいたい健康です。
6. () 疲れやすいほうではない。
7. () いつもからだじゅうが弱っているような気がする。
8. () 歩くときに“からだ”がふらふらすることはない。
9. () 皮膚のあるところがしびれる。
10. () 耳なりはあまりしない。
11. () 仕事をするときはいへん緊張する。
12. () めったに便秘しない。
13. () 人生は価値あるものだ。
14. () 病気になるのをあまり気にしない。
15. () 本を読んでも今までのようによく理解できない。
16. () 記憶力は正常です。
17. () もの音ですぐ眼がさめやすい。
18. () ときどき理由もなくものごとがうまくもいっていないのに幸福で有頂天になる。
19. () 涼しい日でもすぐに汗をかく。
20. () 外出するときに戸や窓をちゃんとしめたか気にしない。
21. () 手足はいつもほどよく温い。
22. () 日常生活は興味のあることでいっぱいです。
23. () ひとつの仕事にうちこむことができない。
24. () 多くの人に真実を納得させるには多くの議論が必要だ。
25. () 親分ぶって威張っている人がいると言うことが正しくてもわざと反対したくなる。
26. () すぐに決心がつかないため損をしたことがよくある。
27. () こんな恥かしがりでなければよいのと思う。
28. () 長時間本を読んでも眼がつかれない。
29. () うまい弁護士のおかげで罪人が釈放されるといつも法律というものがいやになる。
30. () じっと座ってられないくらい気持ちがさっぱり落ちつかないときがある。

第2表 「性」別「神経症」得点(平均点)

企業 項目	性 別 得 点	男				女				全 体			
		S	D	Y	N	S	D	Y	N	S	D	Y	N
N 社	数	208				137				345			
	合	454	863	871	2188	360	636	630	1626	814	1499	1501	3814
	平	2.18	4.15	4.19	10.52	2.62	4.64	4.60	11.87	2.36	4.34	4.35	11.06
H 社	数	43				24				67			
	合	117	256	243	499	73	108	98	279	190	364	341	778
	平	2.72	5.95	5.65	11.60	3.04	4.50	4.08	11.63	2.84	5.43	5.09	11.61
全 体	数	251				161				412			
	合	571	1119	1114	2804	433	744	728	1905	1004	1863	1842	4709
	平	2.27	4.46	4.44	11.17	2.69	4.62	4.52	11.83	2.44	4.52	4.47	11.43

S: 心気症; D: 抑うつ性; Y: ヒステリー性; N: 神経症
 数: 人数; 合: 合計得点; 平: 平均点

12.81($\chi^2(1)=6.63, P<.01$)であった。したがって、「女性」の中で「高得点群」に属する者の割合が、「男性」の中での「それ」よりも統計的に有意に大であると云える。この意味で、「女性」の方が「神経症的傾向」が強い

と云える。

② 「年令」との関係について

分割表に基づく検定は、 $\chi^2=10.53(\chi^2(8)=13.36, P>.10)$ であった。したがって、各「年令」段階における

第3表 「年令」別「神経症」得点 (平均点)

職種	項目	企業				社				全 体			
		N	S	D	Y	N	S	D	Y	N	S	D	Y
20 未	数	3								3			
	合	5	11	16	32					5	11	16	32
	平	1.67	3.67	5.33	10.67					1.67	3.67	5.33	10.67
20 上 25 未	数	66				17				83			
	合	158	288	319	765	56	72	79	207	214	360	398	972
	平	2.39	4.36	4.83	11.59	3.29	4.24	4.65	12.18	2.58	4.34	4.80	11.71
25 上 30 未	数	93				20				113			
	合	228	397	421	1046	56	88	106	250	284	485	527	1296
	平	2.45	4.27	4.53	11.25	2.80	4.40	5.30	12.50	2.51	4.29	4.66	11.47
30 上 35 未	数	104				5				109			
	合	263	460	424	1147	13	22	19	54	276	482	443	1201
	平	2.53	4.42	4.08	11.03	2.60	4.40	3.80	10.80	2.53	4.42	4.06	11.02
35 上 40 未	数	44				8				52			
	合	95	195	194	484	20	32	32	84	115	299	271	685
	平	2.16	4.43	4.41	11.00	2.50	4.00	4.00	10.50	2.21	5.75	5.21	13.17
40 上 45 未	数	20				8				28			
	合	43	82	73	198	20	42	31	93	63	124	104	291
	平	2.15	4.10	3.65	9.90	2.50	5.25	3.88	11.63	2.25	4.43	3.71	10.39
45 上 50 未	数	8				1				9			
	合	11	40	29	80	2	4	7	13	13	44	36	93
	平	1.38	5.00	3.63	10.00	2.00	4.00	7.00	13.00	1.44	4.89	4.00	10.33
50 上 55 未	数	1				6				7			
	合	2	4	5	11	21	26	17	64	23	30	22	75
	平	2.00	4.00	5.00	11.00	3.50	4.33	2.83	10.67	3.29	4.29	3.14	10.71
55 上	数	6				2				8			
	合	9	25	23	57	2	6	5	13	11	31	28	70
	平	1.50	4.17	3.83	9.50	1.00	3.00	2.50	6.50	1.38	3.88	3.50	8.75
全 体	数	345				67				412			
	合	814	1502	1504	3820	190	364	341	895	1004	1866	1845	4715
	平	2.36	4.35	4.36	11.07	2.84	5.43	5.09	13.36	2.44	4.53	4.48	11.44

20未:20才未満;20上・25未:20才以上~25才未満;55上:55才以上
 S:心気症;D:抑うつ性;Y:ヒステリー性;N:神経症
 数:人数;合:合計得点;平:平均点

「高得点群」に属する者の割合は、「年令」段階間で全体として異なるとは云えない。この意味で、「年令」は「神経症的傾向」の強さと関連しないと云える。

③ 「勤続年数」との関連

分割表に基づく検定は、 $\chi^2=13.08(\chi^{.052}(6)=12.59, P<.05)$ であった。したがって、各「勤続年数」段階における「高得点群」に属する者の割合は、「勤続年数」段階間で全体として統計的に有意に異なると云える。この意味で「勤続年数」は「神経症的傾向」の強さと関連すると云える。

それで、次に各「勤続年数」間での一対比較を χ^2 検定で行なった。結果は、「勤続年数」が「3年未満」の者の中で「高得点群」に属する者の割合が、他の「勤続年数」

段階での「それ」よりも大であった。この意味で、「勤続年数」が「3年未満」の者は「神経症的傾向」が強いと云える。

④ 「学歴」との関連

分割表に基づく検定は、 $\chi^2=2.76(\chi^{.102}(3)=6.25, P>.10)$ であった。したがって、各「学歴」における「高得点群」に属する者の割合は、「学歴」間で全体として異なるとは云えない。この意味で、「学歴」は「神経症的傾向」の強さと関連しないと云える。

⑤ 「地位」との関係

分割表に基づく検定は、 $\chi^2=9.12(\chi^{.102}(4)=7.78, P<.10)$ であった。したがって、各「地位」における「高得点群」に属する者の割合は、「地位」間で全体として統計的

第4表 「勤続年数」別「神経症」得点(平均点)

勤続年数	項目	企業				社				全 体			
		S	D	Y	N	S	D	Y	N	S	D	Y	N
3未	数	70				27				97			
	合	169	309	338	816	79	111	128	318	248	420	466	1134
	平	2.41	4.41	4.83	11.66	2.93	4.11	4.74	11.78	2.56	4.33	4.80	11.69
3上・5未	数	32				10				42			
	合	62	137	131	330	26	47	42	115	88	184	173	445
	平	1.94	4.28	4.09	10.31	2.60	4.70	4.20	11.50	2.10	4.38	4.12	10.60
5上・10未	数	107				14				121			
	合	280	448	474	1202	39	99	104	242	319	547	578	1444
	平	2.62	4.19	4.43	11.23	2.79	7.07	7.43	17.29	2.64	4.52	4.78	11.93
10上・15未	数	106				10				116			
	合	236	476	421	1133	25	45	35	105	261	521	456	1238
	平	2.23	4.49	3.97	10.69	2.50	4.50	3.50	10.50	2.25	4.49	3.93	10.67
15上・20未	数	15				4				19			
	合	25	64	64	153	14	18	22	45	39	118	86	243
	平	1.67	4.27	4.27	10.20	3.50	4.50	5.50	11.25	2.05	6.21	4.53	12.79
20上・25未	数	6				6				6			
	合	16	27	25	68					16	27	25	68
	平	2.67	4.50	4.17	11.33					2.67	4.50	4.17	11.33
25上・30未	数												
	合												
	平												
30上	数					1				1			
	合					4	4	4	12	4	4	4	12
	平					4.00	4.00	4.00	12.00	4.00	4.00	4.00	12.00
全 体	数	336				66				402			
	合	788	1461	1453	3702	187	360	335	882	975	1821	1788	4584
	平	2.35	4.35	4.32	11.02	2.83	5.45	5.08	13.36	2.43	4.53	4.45	11.40

3未：3年未満；3上・5未：3年以上～5年未満；30上：30年以上
 S：心気症；D：抑うつ性；Y：ヒステリー性；N：神経症
 数：人数；合：合計得点；平：平均点

に有意に異なる傾向が認められると云える。この意味で「地位」は「神経症的傾向」の強さと関連すると云える。

それで、次に各「地位」間での一対比較を χ^2 検定で行なった。結果は、「地位」が「一般」の者の中で「高得点群」に属する者の割合が、「課長クラス」での「それ」よりも大であった。この意味で「地位」が「一般」の者は「神経症的傾向」が強いと云える。

⑥「職種」との関係

分割表に基づく検定は、 $\chi^2=2.51(\chi^2_{.10}(3)=6.25, P>.10)$ であった。したがって、各「職種」における「高得点群」に属する者の割合は、「職種」間で全体として異なるとは云えない。この意味で「職種」は「神経症的傾向」の強さと関連しないと云える。

以上のことから、「性」、「勤続年数」、「地位」の3つの「属性」が、「神経症的傾向」の強さに関連することが分かった。「性」については「女性」、「勤続年数」について

は「3年未満」、「地位」については「一般」において「神経症的傾向」が強いことが示された。

<考察>

<結果>の項で示されたように「女性」は「男性」よりも「神経症的傾向」が強かった。質問紙票を用いた各種の自覚症状調査においてはいずれの場合も、そして、調査対象集団の種類に関係なく、女性の訴えの方が男性よりも高率であり、また、この傾向は世界的であることを各種の資料は示している。このことは「女性」の方が「男性」よりも「精神的健康」において不調であるというよりも、「女性」の方が「男性」よりも感情が鋭敏であり、心身の違和を強く感じる傾向があると考えた方がよいと思われる。

職場への心身の順応、昨今の日本の社会における中年

第 5 表 「学歴」 別 「神経症」 得点 (平均点)

学歴	項目	企業 尺度	社				H 社				全 体			
			S	D	Y	N	S	D	Y	N	S	D	Y	N
中	数		39				7				46			
	合		111	198	154	463	24	34	24	82	135	232	178	545
	平		2.85	5.88	3.95	11.87	3.43	4.86	3.43	11.71	2.93	5.04	3.87	11.85
高	数		164				25				189			
	合		393	762	698	1817	65	108	99	272	458	906	842	2206
	平		2.40	4.43	4.26	11.08	2.60	4.32	3.96	10.88	2.42	4.79	4.46	11.67
短	数		52				X				52			
	合		132	221	247	600					132	221	247	600
	平		2.54	4.25	4.75	11.54					2.54	4.25	4.75	11.53
大	数		86				34				120			
	合		167	342	385	894	101	147	171	419	268	489	556	1313
	平		1.94	3.98	4.48	10.40	2.97	4.32	5.03	12.32	2.33	4.08	4.63	10.94
全体	数		341				66				407			
	合		803	1487	1484	3774	190	361	339	890	993	1848	1823	4664
	平		2.35	4.36	4.35	11.07	2.88	5.47	5.14	13.48	2.44	4.54	4.48	11.46

中：中学卒；高：高校卒；短：短大卒；大：大学；大学院卒
 S：心気症；D：抑うつ性；Y：ヒステリー性；N：神経症
 数：人数；合：合計得点；平：平均点

第 6 表 「地位」 別 「神経症」 得点 (平均点)

地位	項目	企業 尺度	社				H 社				全 体			
			S	D	Y	N	S	D	Y	N	S	D	Y	N
パ	数		7				20				27			
	合		12	37	29	78	43	124	80	247	55	161	109	325
	平		1.71	5.29	4.14	11.14	2.15	6.20	4.00	12.35	2.04	5.96	4.04	12.04
一	数		228				22				250			
	合		600	1024	1021	2645	69	88	101	258	669	1112	1122	2903
	平		2.63	4.49	4.48	11.60	3.14	4.00	4.59	11.73	2.68	4.45	4.49	11.61
係	数		62				17				79			
	合		132	237	270	639	50	79	85	214	182	316	355	853
	平		2.13	3.82	4.35	10.31	2.94	4.65	5.00	12.59	2.30	4.00	4.49	10.80
課	数		31				6				37			
	合		43	135	123	301	17	24	29	70	60	195	188	443
	平		1.39	4.35	3.97	9.71	2.83	4.00	4.83	11.67	1.62	5.27	5.08	11.92
部	数		15				2				17			
	合		23	63	55	141	11	13	10	34	34	76	65	175
	平		1.53	4.20	3.67	9.40	5.50	6.50	5.00	17.00	2.00	4.47	3.82	10.29
全体	数		343				67				410			
	合		810	1496	1498	3804	190	364	341	895	1000	1860	1839	4699
	平		2.36	4.36	4.37	11.09	2.84	5.43	5.09	13.36	2.44	4.54	4.49	11.46

パ：パート；一：一般；係：係長クラス；課：課長クラス；部：部長クラス以上
 S：心気症；D：抑うつ性；Y：ヒステリー性；N：神経症
 数：人数；合：合計得点；平：平均点

の各種の精神障害現象から、「20才未満」の「若年層」と「40代」とにおいて「神経症的傾向」が強く現われることが予想されたが、前述の結果はこのことを支持しなかった。「年令」と「勤続年数」とが平行する日本の職場の場合、「勤続年数」においては、「3年未満」と「20上・

25才」位においてピークが予想されたが、結果は「3年未満」の強さを支持しただけであった。

「学歴」、「職種」については、知的水準が高い程心身の異常を意識する割合が高いと考えられるが、結果はこれを支持しなかった。

第7表 「職種」別「神経症」得点 (平均点)

職種	項目	N 社				H 社				全 体			
		S	D	Y	N	S	D	Y	N	S	D	Y	N
技術	数	36								36			
	合	65	141	152	358					65	141	152	358
	平	1.81	3.92	4.22	9.94					1.81	3.92	4.22	9.94
事務	数	97				21				118			
	合	242	429	448	1119	68	84	94	246	310	513	542	1365
	平	2.49	4.42	4.62	11.54	3.24	4.00	4.48	11.71	2.63	4.35	4.59	11.57
営業	数	90				26				116			
	合	192	358	390	940	79	156	167	402	271	514	557	1342
	平	2.13	3.98	4.33	10.44	3.04	6.00	6.42	15.46	2.34	4.43	4.80	11.57
技能	数	116								116			
	合	296	547	490	1333					296	547	490	1333
	平	2.55	4.72	4.22	11.49					2.55	4.72	4.22	11.49
全体	数	339				47				386			
	合	795	1475	1480	3750	147	240	261	648	942	1715	1741	4398
	平	2.26	4.35	4.37	11.06	1.94	5.11	5.55	13.79	2.44	4.44	4.51	11.39

S : 心気症; D : 抑うつ性; Y : ヒステリー性; N : 神経症
 数 : 人数; 合 : 合計得点; 平 : 平均点

「地位」については、職場における組織の接点としてのいわゆる「中間管理者層」たる「課長クラス」において各種のストレスが強くなるので「神経症的傾向」が強いと考えられたが、結果はむしろ予想されたことと逆であった。

今後の課題としては、調査対象者の数を増大させて「個人的属性」の効果の詳細なる検討が要求されよう。

参 考 文 献

1. 大道 明 職場の精神衛生 1967 創元社
2. 加藤正明 ノイローゼ 1981 創元社
3. 日本 MMPI 研究会(編) MMPIハンドブック
1969 三京房

23. () ひとつの仕事にうちこむことができない。
 「職種」別「神経症」得点 (平均点)